



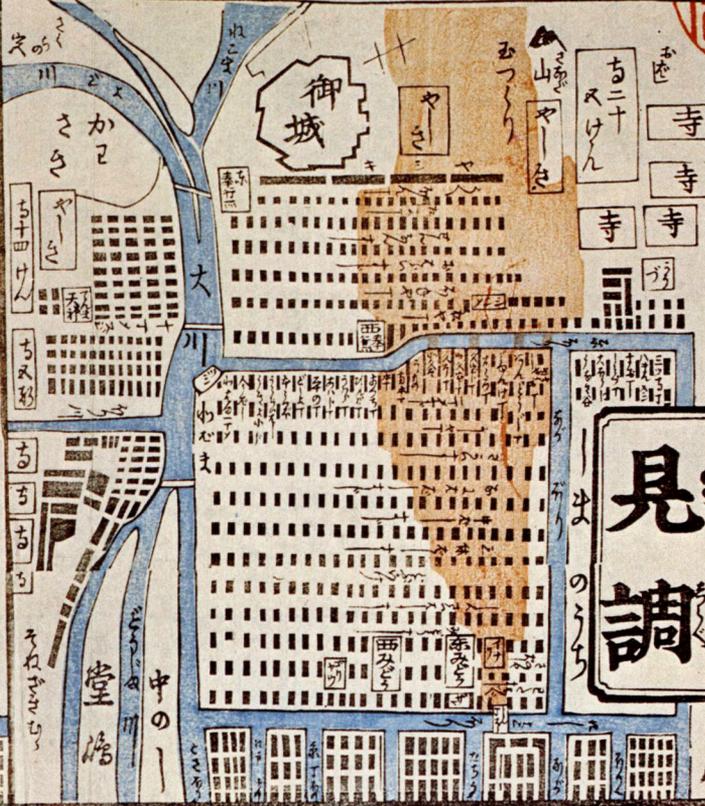


# 火災用心

# 大阪今昔三度の大火

文久三亥年大火

見細調本



天保八酉年大火

嶋ノ内ノ部



心得之記

母小火の心を忘れずきりかた  
ありありと見せしめしめしめしめ  
まゝと云ふ知れしめしめしめしめ  
大の陽にて木火土金水の  
用あり火の災ある有るの酒  
くく勿得りしめしめしめしめ  
くく勿得りしめしめしめしめ

文久三癸亥年十一月廿一日  
辰五の時新町橋筋沿河入る  
出火いよいよ和風をばけり  
して東一府ノ焼死夫々西風  
かり舞つらるる又西風ノ風か  
ら西風へやけゆくやせやく夫より  
上町ノ焼死火火勢まほしくてげ  
せんを上町とも一ひやく人かり  
又新町火とも争うおと入まるとに  
老若男女のおとろき者低くつ  
がう焼うた坂東の区まで焼死候  
又久々大坂市中之ところよはじま  
同月廿二日萱原の町火焚う十九

町数 百八十二丁  
家数 四千七百余  
竈数 二万八千余  
土蔵 三百二十余  
神仏 八十余 死人 四十九人  
けり人数 志士 既

性存より大坂でんがら又火あ  
らゝとてん後世世の種具  
火の元知候のありもあらんれ  
一紙と書して法人のんをせと  
わくまのり

天保八閏二月十九日卯時  
天候より出づ風をけりしめ  
ふく飛火の区上町は城垣ま  
焼失せんと長者町 大家  
番も焼失夫よりむかひ町ま  
やけあつた火の物と死者も  
はせり人の見難いところ